

11月、合流点から左岸の径にはいる。快晴なのに薄暮かと思える森林の繁りよりで、どこを歩いているのか見当がつかない。どうやら支谷へ踏み込んでしまったらしいが、よくわからぬ。確かに本谷と思ふ所まで戻って、藪をくぐり、谷底へ出、流れをさかのぼることにする。あちこちに腐って谷壁からずり落ちた木馬道の材木と倒木が、出水の際に流されて積み重なり、谷をとざす高さ2～3mの逆茂木となっている。所々に2～3段の滝があって、その中途に家ならば3階建ぐらいの大岩塊が突立っていたり、岩壁が両岸から巾2mに迫ったりして、なかなかスリリングである。破碎帯も数カ所で見えた。がそれよりも何よりも、賤母本谷の人気の無さ、その幽々莫々たる寂寥感・隔絶感にすっかり魅せられてしまった。

宿へ帰って訊ねられるままに、全然陽の射さないような谷ですよという、老齡の女主人が、賤母日影ということばがあったという。賤母山の山陰の木曾川ぞいの昔の路は、年中日のあたることなく、それでその部分をそう呼んだのだとのこと。木曾路の険阻さは今は僅かに「犬帰」の地名に偲ばれるだけだが、幽暗な賤母日影の面影はまだ多分に本谷に残っているのではなかろうか。1日おいて私は、今度は源流部から左岸の歩道を下った。今年もまた行くつもりでいる。私の裡に生きつづけている原人の耳に、賤母本谷の呼ぶ声が聞えるから。

強 歩

幸 田 清 喜

ときどき強歩をやって、ひとり悦に入ることがある。月のある夜など千歳烏山の駅を降りると途端に空気がかくわしく、空がぬけるように澄んでいて心楽しいとき、強歩したい衝動にかられる。前方に若者が濶歩していると競争心がかきたてられる。誰かに追いぬけられると決定的に強歩体制にはいる。オリンピックで競歩に優勝して、ゴール前のフィールドへ飛びだした奥さんと抱擁して歓喜したあのイギリス青年の姿勢の真似である。上体を真直ぐに胸をはり、つまさきで地につくところへ踵を下し、息を小刻みに整えてテンポを速めるだけでよい。大地がスイスイ後ろへいく、黒い影が前へとぶ、めざす相手を抜き返したときの気持は悪くない。敵もさるもの、やられたと感付くことがあるらしくグイグイ迫ってくる場合がある。こんな時には早くうちへ着きたいと思う。途中で道をそれたらしく足音が小さくなるとヤレヤレと思う。玄関の扉をあけた途端に両足がひどくからみ合う。千鳥足のような振幅の大きいものでなく、早足で一直線上をいくあのものつれ方だ。努めて平静を装っていても大抵家内に見破られる。ところが実を言うと、その子供のようなと言われることが気に入って強歩が止められないのだ。コムラガエリを起しますよとも言う。しかし私には、長距離の強歩でもコムラガエリに関係がないようだ。数年前、黒姫の開発計画を手伝って信濃町に

いたとき、三人で町はづれから野尻湖畔まで歩いたことがある。いつの間にか私は強歩、若き女性は駆け足、若き男性は緩歩と駆け足と小休止といった三人三様での競争をやって、息は私が最も平静だった。だからすぐその足で湖畔でふな釣りをやり、私は目の下八寸の大ふなを釣り上げられた。その晩、足がひきつりますよとおどされながら寝についたが、野尻湖ホテルで朝まで何ともなくグッスリ休めた。

— コムラガエリといえば、昨年冬、ブラジルで福井さんと同じ夜同じ時刻にコムラガエシをやり、明朝足をさすって、それを互に白状したことがある。コムラガエリは疲労もさることながら、気候と食物とその他がそれに関係して総合されたある状態に達したときに起るように思われる。—

強歩のくせは金沢時代についたようだ。時の学長、医学の大家が老化と遅歩の相関を言ったことから私の強歩がはじまった。それに私は、人間は老化するほどからだの輪郭がぼやけてくるように思う。ところで強歩は輪郭を絶対にぼやけさせない。つまり強歩は老化への抵抗であると思っている。だから子供のようなと言われると嬉しいのである。

片思いの無害の敵愾心を存分に燃やせる千歳烏山から自宅までの強歩六分距離は私には天恵である。

秀吉と気候

福井英一郎

突飛な表題でいささか恐縮ながら、ここでは豊臣秀吉と気候が直接に結びつくというのではなく、内容的にはむしろ“戦争と気候”とでも言った方がよいと思われるが、気候を巧みに利用した秀吉をとり上げてみたいのである。

古来気象と戦争はつきものであったようで、日本に例をとっても元寇の時の神風によるモンゴル軍の退散をはじめとして、川中島の合戦（霧）その他歴史上に多くの記録が見られ、比較的近い時代では日本海海戦（霧）を奉天大会戦（黄砂による風塵）などがあげられる。またこれとは逆に戦争によって気象学が進歩を早めたことも事実であり、天気図はクリミア戦争を契機としてフランスではじめられたもの、さらに今世紀の初めに気象学に革命的变化を与えたとされる前線論も、間接的とは言え、結局は第一次世界大戦の産物とも考えられよう、それは戦争のために外国からの気象情報を絶たれたノルウェイが自国内の観測網を極度に稠密化した時に偶然にも気温その他の特性分布が地上である線を境にして急変する事実が発見されたことに源を発している。前線の原語“front”という言葉それ自体が既に当時の軍隊用語であったことと考え合せて興味が深く、こ